

2024年2月10日に日(土)の<土曜の午後の ABC>は、波止場会館4Bです。

《語る『古事記』、書かれた『古事記』》

というタイトルで、これまで勉強してきたことを整理してみたいと思います。

『古事記』を素材に<無文字文化>と<文字文化>の問題を考えようとして、あらためて『古事記』を読み出したわけですが、テキストの読み方一つとっても、伝統的な慣習で読まれている（露伴のいう「雲の影」にいることを反省していない、ボク自身その影に囚われていると思う）ところが多々あり、予想以上に納得の行く読みに手間がかかって今回も始めから読み直して、訂正版をお渡しすることにしました。

その機会に、『古事記』が私たちに語りかけていることを、あらためて整理しておきたいと思い、今回は『古事記』の、いままでのABCでの勉強を振り返り、まとめとするひとときにしたいと考えました。

まず『古事記』をどう呼ぶかですが、「コジキ」は近代の便宜主義が慣用化した呼称で、出来ればやめたい呼び名です。昔は「ふるごとのふみ」と呼ばれていたようですが、「ふみ」というと「文」の文字を連想し「書かれた古事記」しか指さないように受け止めてしまいます。もう少し気配りした呼び名として「ふるごとのき」なぞボクの好みに合うのですが…「ふるごとのかたり」なぞもいいなと思いますが、「記」の字に「カタリ」を訓ずるのは無理があります。ま、慣用に従い「コジキ」と呼びながら、そういう問題があるよということをいつも考えていること、これがいちばん大切なことでしょう。（以下、「ですます」調をあらためて議論を進めます。）

★『古事記』とはなにか

『古事記』は、無文字文化の時代に、皇族や豪族に所属する語り部によって語り継がれて来た、日本列島の誕生とそこに住む人々と神々の記録集である。

神々のお告げのような恐れ多い出来事を民草に語り告げる儀式のような形で語られていた。

（出来事を<言葉>にするこの行為は、小説だとか舞踊だとか歌謡などと言った区別観念のない時代の記述である。叙述形態のジャンル分けは文字文化時代になって始まる。）

その<言葉>を<文字>に記録して遺そうとしたのが、われわれの^{てのうち}掌にある『古事記』である。

言い換えれば、文字文化の創生へ第一歩を踏み出そうとした書物である。

この一冊、つまり<書かれた『古事記』>の奥に<語られた『古事記』>の面影が隠されており、書かれた『古事記』を読みながら、われわれは無意識の裡に<語られる『古事記』>を脳裏に描いている。

<語られる『古事記』>とは無文字文化時代の遺産。

<書かれた『古事記』>は<文字文化>の所産。

★その特徴：

1 基本的に漢文体で綴られている。そのところどころに古倭言葉^{こやまとことば}が漢字で記され割注を入れて漢文読みしないように注意を促している。倭風漢文と呼ぶのがその実態にふさわしい。(細かい語句の読みなどに関する問題は原文の読みのところで記す。ここでは、この書物が伝える根源的な思想に関わるところをメモしたい。)

2 日本列島各地で語り継がれていた「国産み物語」^{くにう}を、中央政府(飛鳥大和朝廷)が標準化(一本化)しようとして整備を試みた書である。そのさい、時の権力掌握者(日本天皇)の系譜と「国(日本列島)」の発起源(ものごとの始まりとしての厳かさ)を重ね合わせようとした、その結果書物自体が神話性を帯びることになった。根底にあるのは、時の権力の史的裏付けの試みだが、そこには二つの欲望が蠢いている。一つは自分たちの祖先の姿の<美>を称えること、もう一つは、祖先から伝わる出来事が権力維持の^{エネルギー}力<利>と<富>として働いていることを語り告げ、しかも聴き手に^{たの}娛ませて聞かせようとするところにある。聴き手を喜び娛ませるのは、ほんらい<利>を求めない<美>の喜びである。しかし、どんな<美>にも<利>への欲望が奥に息づいていることも確かである。物語の関心は次第にその軸を<美>から<利>へ移して行く。

<美>は<利>を<反>として成立し、<利>もまた<美>を<反>として成立する。

<美>と<利>は人類が人類(人間)であろうとするときに働いた初源の欲望であった。それは、<永遠>なる者への^{おの}慄き、畏怖である。『古事記』では、冒頭の神々の登場と隠栖の語りにそれが読める。天之御中主神以下^{あまのみなかのぬしのかみ}国之常立神、豊雲野神^{くにのとこたちのかみ}までの七柱の神々は高天原^{とよくものかみ}に出現して[芽を出し]身を隠す[散り落ちる]。それは草や樹々が根を張るように土の深くに身を潜め、草や樹々を支える永遠なる力の源泉となる。生命の循環という永遠。こうして大地の奥に身を潜めて、地上の世界に隠然たる力を発揮する<根>。これもまた<反>の象徴だが、この思考形式が<利>と<富>

>の世界で「院政」として列島の政治形態の原形になっていることにも注目しておきたい。

3 日本列島に住む人々は、無文字文化時代（15,000B.C.～400A.D.）どんな経験を積み重ね、文字文化を作ろうとしていたか。<永遠>なるものへの観念の変遷が最大の問題として横たわっている。

<永遠>なるものを、人々は早くから、というより人間が人間になったときから<美>と<利>に求めて来た。その変移の様子が『古事記』の中に塗り込むように語られている。

4 『古事記』は人々の基本欲望としての<美>が<利・富>へと変移して行くさまを記録する、その意味で、人間とは何かという問いをその起源から考えさせる書である。（この面はこれまで注目してされないできた。その理由の一つは、この書を「日本」の歴史（制度の歴史）物語として読もうとし過ぎて来たところにある。）

5 現代、歴史はつねに<書かれたこと>としてしか存在しない。かつて（無文字文化時代）は、<語られたこと>だった<歴史>が<書かれたもの>に変わった。その変移の機微を証言するのが『古事記』である。と同時に、語られたことが書かれたものになるとき、人間のあり方のなかがどう変わったのか、それが現代を生きているわれわれにどんな問題を投げかけて来るのか、を考えさせてくれる書である。（現代の文字文化社会に無文字文化は隠れて大きな役割を演じている！）

6 『古事記』は「日本」を例にとって世界の<始まり>の姿を、<声>と<身振り>で伝えようとしていたが、それを<文字>で伝えるように方針を変えて生まれた書である。（ここでもう一つ別の問題が浮上して来る。それは「日本」という言葉を<ナショナルな空間>という意味で取らないで、<人々がたまたま棲んでいる土地としての空間>の名称と受け止める習慣を身につけて行くことの大事さである。ナショナルな観念としての「日本」が蔓延っていくのは文字文化の成長と並行している。）

7 世界の<始まり>を語る『古事記』：人間が人間であるための<始まり>。世界が始まる時に生まれて隠れる神々は「伊邪那岐」「伊邪那美」までの15の「神」。彼らは「^{なになにかみ}…神」と呼ばれ、「伊邪那岐」「伊邪那美」に至って「伊邪那岐命」という風に「^{みこと}命」と記されて行く。「神」から「命」へ。この変移に注目したい。「^{かみ}神」とは、自然界の生命力の喩であり（『古事記』ではとくに「上つ巻」で説く神々と国の誕生のあたりは、あたかも植物の生育の喩のように語られている）、「^{みこと}命」は「^{ひと}人」の特質を帯びた活動者（最も人間に近い神のあり方、あるいはその逆、最も神に

近い人間の存在容態を体現している者)を指示しているようである。無文字文化時代、^{ひえたのあれい}稗田阿禮は「カミ」と「ミコト」を音で呼び分けていたのだろうが、^{おおのやすまる}太安萬呂がそれに「命」(「尊」ではなく)の文字を宛てた経緯には(それをいまさら辿ることは出来ないが)精一杯想像推理しなければならない。

8 「こをろこをろ」のこと：擬音、他者抜き<美>。言葉と表現の初源形態としての擬音。それは独り言に似て、型式化の力が乏しい。神々の^{めい}命を受けて伊邪那岐伊邪那美の二人は、神々から授かった天の沼矛(^{ぬぼこ}瓊矛)を、^{くらげ}海月のように海に漂う「国」(形をなさない^{うきあぶら}浮脂のようなものともいう)に「指し」、水面に「画」いたら、塩が「こをろこをろ」と鳴き、矛(筆)を引き上げるとその筆先に描かれた塩が積り重なって、島が出来た。

「指し」とあるように伊邪那岐伊邪那美の二人は神々から命を受けて新しい島を創るという大きな目的を持って玉で飾られた矛を絵筆のように動かしたのである。^{えが}「画」いたとわざわざ「画」の字を選んでいる。「垂り落ちる」というのは「絵具が塗られた」の喩である。「塩」も絵具の喩。このとき二人は無心に「美しい島を作りたい」と願っていたことであろう。最もピュアな<美>への願いと行為が語られている。浮脂のような海はそれに応えて「こをろこをろ」と「鳴く(物体としての海・浮脂が歌う!)。描いた対象が生きものとなる。このとき二人はまた玉で飾られた^{ぬぼこ}瓊矛を、一本の豪華な瓊矛を二人で持って夢中で踊っていたさまを想像したい。ただただ「美しい島」を創りたいという厳かな踊りである。ここでは「描く」ことが「踊り」と同義になっている。描くことは踊ることであり、踊ることは描くことであり、踊り描くことが一つになってなにかが生まれるのである。

「こをろこをろ」は浮脂となっていた海が二人の踊りと歌で(呪文のように)高調して発したさまを語る(描写する)擬音である。擬音は、言葉の最も原初的な表出形態である。行為と感情が未分化のまま、思わず独り言のように出た声。踊りや歌には欠かせない表現方法である。言葉は擬音から生まれたと言っても過言ではあるまい。

9 「見立て」のこと：こうして生まれた^{おのころしま}淤能碁呂嶋に降り立つ二人は、神々を祀り神殿を見立てる。「見立て」はその後の日本列島全歴史を貫いて行く<美>の表出の手法である。それは、形式化され共同性を持つ<美>を生み出して行く。<美>はまず個と個の^{ついかんけい}対関係のなかに誕生するが、すぐにもっと多くの個と共有したいという欲望に促される(内面に<利>と<富>の欲望が隠れて

働いているからである)。御柱と御殿を見立てようとしたときの伊邪那岐と伊邪那美の二人はこの個としての美を見つけた喜びからそれを神々と分かち合いたいという共有化への欲望の接点にいる。次第に、<利>と<富>の欲望が二人、とくに伊邪那岐の方に湧き上がって来る。それが、伊邪那美を黄泉の国から取り戻せないと知ったときの伊邪那岐の叫びに現れる。「ボクたちの島づくりはまだ終わっていないんだ、帰って来ておくれ、ナミよ！（「愛我那邇妹命 吾与汝所作之国未作竟 故可還」）」

この叫びは<美>から<利>への変移の転換点を象徴する叫びである。鳥々や神々を産む作業が純粹なく創る喜び>から<利・富>を生産する欲望へ伊邪那岐の意識のどこかで変質して行く。

10 名前の繰り返しと<美>から<利・富>への変移の関係： 神々と国々が生まれる記述は、長ながと国の名神の名を、これでもかこれでもかと言わんばかりに羅列して行く。これを古代説話の形式として片付けるのは簡単だが、それで済ますわけにはいかない。おそらく『古事記』が語られていたときは、語り部が身振り手振りをつけて踊り、声に抑揚調を乗せて歌い、聴く者も一緒に身体を和してこの繰り返しを、ちょうど現代の歌曲のリフレインのように楽しんでいたにちがいない。しかし、文字にされたときから、おそらく反復の退屈さは始まっていただろう。それでもなお、この部分が大きな位置を占めて行くのは、この名前の羅列反復のなかで、繰り返し繰り返しするなかで、なにかが起きていることを、聴く者語る者を巻き込みながら告げているのだ。主人公の伊邪那岐の国産み意識が<美>の創造から<利・富>の創造へ変質して行くさま、意識の奥深くでなにかが変わって行くさまをこうして伝えようとしているのである。

11 その過程で、<文字>は<物>へと変化する。<声>は物に成り続けられない。かつて<無文字文化時代>にあっては、その儚さに<永遠>を見つけていた。<文字>の習得と共に、この慣いは忘れられて行った。<物>は<利>の機能を奢り<富>として蓄積することを要求する。<美>はこうして<利><富>に座を奪われて行く。

12 しかし<美>は決して退場して消えて行くわけではない。いつの時代でも<美>は蘇り、<利>と<富>に酔う人々に悲しい眼差しを投げかけてきた。現在にあってはそれは続く。人類の歴史は<美>と<利・富>の果てしない確執の歴史だと言い換えてもいいかもしれない。

そのとき、『古事記』を<美>から<利>への物語—あるいは<芸術の起源>の物語—と言い換えることが出来ることに気づく。

補説 人間の最も基本を成す欲望は<美>である。人が生きるということは<美しく>ありたいと願うところから始まる、
という考えをボクは主張する。

「衣食足りて礼節を知る」というのは東アジアに流布する儒教の教えのひとつであり、西ヨーロッパでも、食欲と性欲を人間の基本欲望とする考えが通説になっている。その考え方に反論して「遊び」こそ人間の根源的欲望だという説を唱えた人もいた。

しかし、食にしても性行為にしても遊びにしても、そういう欲望を持ちそれを満たそうとすると、必ずその行為を「美しく」なしとげたいという欲望がまず働いていることに気づきたい。

ときどき、反抗的な人が、目を背けるような汚い行為をしたり醜さを見せびらかしたりするが、あれは「美しい」ということの世俗化（<利・富>に屈従する<美>）への反抗であって、本当に美しいものを獲得実現したいから敢えて反対の表現をしていることは誰でも知っている。ただ、お腹が減ったなにかを食べたいだけなら、人間以外の動物と変わらない。

人間である限り、同じ食べるなら、どんなに飢餓状態にあっても、美しいものを美しく食べたいと願っている。（「美しいもの」を食べたいということは、「おいしいもの」を食べたいという意味にほかならない。かくて、「おいしい」ということを「美味しい」と漢字で書くようになった。）あらゆる人間の行動の根底には「美しくありたい」という欲望が先行している。その欲望を満たそうとすると、人間は「人間」になった。よく二足直立歩行が人間を他の動物と区別する印＝現象として取り上げられるが、この二足直立歩行も四足歩行より美しい（背が高く、見上げられるということは美の条件を満たす）と気がついたからそれを試みたところから始まったにちがいない。二足直立歩行に伴う両手が自由になったとかの特権は、すべてそれから後に発生するのである。

人間の最も基本的な欲望、人間を人間たらしめた最初の根源的な欲望は、<美>にある。

この<美>は、誰もが持つことが出来、みんなで持ち合うときの喜びは代え難く大きい。物質として保存が効かず、分け合う力も弱い。その意味で、<美>は儂い。欲深な人間は、その美をなにか永続する<物>に換えたがる。文字文化がその役割を担う。そこへ<利>と<富>の欲望が付けこむ。

<美>と言ったとき、その具体的なありかたは、人によってはずいぶん異なって来る。まさか、と思う物を<美しい>と大切にしている人に会うこともある。しかし、それだからといって殺し合いに発展することはない。それぞれがそれぞれの<美>を大切にすることを許し合えるのが<美>である。一人ひとりがちがう<美>を大切にしていなくてもいい。一人ひとりが自分の生の原理を持っていて他者を受け止めているからこそ、人間を最も人間らしく生かして行ける原理となるのが<美>ではないか。

この考えを大切にしてくるとき、『古事記』が<美>から<利>への物語として読み出せることの意義もさらに大きくなるだろう。

また、世界を視る眼差しも、その世界への渉り方も、豊かになって行くのではないか。